

---

# さよなら/銀魂/沖神

槻夜 七瀬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さよなら／銀魂／沖神

### 【Nコード】

N2561F

### 【作者名】

槻夜 七瀬

### 【あらすじ】

虚ろな目をした神楽は真選組の屯所へ向かった。そこに居たのは、体調を崩し寝込む近藤、何かに怯える山崎と、殺気立った土方だった。薄暗い部屋で、隠れんぼをする神楽は……。

## 001 (前書き)

暗いです。死ネタなので、嫌な方は読まない方が良いと思います。  
尚、この物語に対する批判、中傷は避けていただきたくたいです。

PV数4000人突破ありがとうございます

出来るだけ沢山の方々に、この物語が届きますように…

神楽は虚ろな目のまま、真選組の屯所に入っていく。

「……あ」

玄関にいた山崎がぼんやりとした声を上げた。

「すみません、局長は体調不良で寝込んで。ってチャイナさん  
…また」

彼女は無視して、中へずかずかと入っていく。

「あっ……チャイナさん！ チャイナさんっ……………！！」

後ろから山崎が賢明に神楽を呼ぶ。

聞く耳も持たずに、彼女は一つの部屋だけを目指して歩き続けた。

廊下が長く感じる。

どこまで続くのだろう、もうどの位歩いたのだろう。

実際はそれほど歩いていない。遠くもない。

けれどどうしても、長く、長く、彼の部屋に足を踏み入れさせないつもりなのかと思うほどに。

神楽は襖をそつと開いた。

「……………サド？」

部屋の照明は電源が入っていないらしく、中は薄暗かった。

「……………サド、いるんでしょ？ いつまで隠れてるアルか？ もう

何日経ったと思ってるネ、私ずっと会いに来てるアルよ」

声は虚しく、狭い部屋に響いていく。

「…まだ、隠れんぼは終わらないアルね。良いアルよ、私、また来るからネ」

「チャイナさん……………」

聞こえないような細かい声で、追いかけてきた山崎は呟く。  
そして彼の後ろから、殺気立った男が現れた。

「…また来てんのか」

「副長」

「おい、チャイナ娘エ」

殺気立ったまま、瞳孔の開いた目で神楽を睨み付ける。

「お前、いつまで来るつもりだ？」

その言葉を吐き捨てるように言った。

「…いつまで？ ……そーね、サドが隠れんぼをやめるって言うたら、ヨ」

「サド…?」

土方の声はいつもの何倍も冷たい。

「いつまでそんなこと言ってる!？」  
もう…アイツ沖田はっ  
「!」

「っ…ふくちよ…!」

「『アイツは』、どーしたネ？」

「どーした…って……………」

ギリッと拳をつくる土方。

「あいつはし」

「どーもしてないネ。だってほら、そこにいるんだから」

「はッ……………!？」

土方は指さされた方を見た。

そこには、薄暗く、彼の隊服が掛けられた壁があるだけだ。

「やっと出てきてくれたアル。待ってたのヨ…？ お前、隠れるの  
上手いから、探せなかったネ」

「…やめッ……………」

山崎は襖の陰に隠れ、ガタガタと震えている。

「う、そ…だろ？ 靈感でも、あるつてのよ……………」

土方の顔は青ざめていた。

それでも神楽は、虚ろな瞳で微笑む。

「そんな顔してこっち見ないでヨ。折角遊びに来たのに」

…その瞳の先には、何があるというのか。  
誰が居るといふのだ。

『何も無い』、その部屋に。

「やめてくださいッ……………！」

青ざめた顔で、ずっとガタガタ震えていた。  
山崎の前を、見覚えのある男が横切る。

「…！ 旦那……………？」

「あれ…？ もう隠れちゃったネ。…ねえ、サド……………今日は何か変ネ。いつもなら多串くんを追い出すのに…ザキのミントンをからかうのに」

「やめるッ！」

「副長！」

「黙れ、こいつアイカレてる！」

「…人に向かって、その言い草はないアル」

明らかに、神楽は苛立っていた。

「あいつはッ……………総悟はもう…！」



「ども、すみませんでしたア」

「！」

そつと、神楽を抱きかかえたのは銀時だ。

「お前……」

「……………あ！」

彼女は銀時の腕を振り解き、指を指した。

「サドッ！」

「！」

「サドッ！　ねえ、また出てきてくれたアルね？　私を一人になんてしないでヨ。多串くんは怒ってるし、ザキはなんかに怯えてる……  
銀ちゃんはお前に会わせないようにするネ」

「おいっ！」

土方の怒声は、神楽には届いていない。

「神楽……お前、何が見えてるんだ」

「なに、が……………?」

銀時の声が聞こえたのか、神楽は振り向いた。

その瞳を見て、銀時はゾツとする。

まるで何も見えていないかのようで。

話し掛ける、銀時の姿さえ。

虚ろと言つよりも、それは……………。

『狂ってる』

「何言ってるネ、私が見てるのはサド、ヨ」

ざわっと、冷たい北風が、襖の開いた部屋に吹き込んだ。

Tears have withered .

Every time it thinks of your  
thing

I learn my powerlessness .

その空虚な空間に、彼女の声が響き渡る。

「ほら、そんなところに突っ立ってないで、一緒に遊ぼうヨ」

銀時は血の気のない、青い顔をして俯き、土方は唇を噛み締め、山

崎は耳に手を当てて震えていた。

………為す術がない。

ひたすらな声掛けは決して届くことのない涙。

銀時は最近、よく思うのだ。

ああ、神様。

どうして此奴等を引き離すことが出来るんだ

ゆっくりと足を踏み出す。

そして、もう一度、神楽を抱き寄せた。

「……………銀ちゃん？」

『狂った』その目で銀時を見上げる。

「どーしたネ？ 今日銀ちゃんも変アルよ」

何故だろう、彼女の声はいつもと変わらないのに、違和感が感じられた。

「ほら」

振り解かずに、神楽はそつと指を伸ばす。

「サドも変ヨ。いつもなら銀ちゃんにヤキモチ妬くのに」

「神楽」

「ねえ、どーしたアルか？ みんな変ヨ。具合でも悪いアルか？」

「神楽」

「サドだって、そんなに元気そうなのに……いつまで屯所屯所に籠こもってるつもりヨ？ 私、いつだって来れるワケじゃないアル」

「神楽アッ………！！」

銀時の腕の中で、神楽はびくりと震えた。

「ぎんちゃ……」

「アイツ沖田はもう居ないんだ！ ……居ないんだよ」

ふるふると首を横に振る。

「…そんなことないネ！ だって…サドは、沖田はそこに居る…」

「違うんだ！ ……お前が見てるのは…！ それはアイツじゃねえんだよ…！」

「…じゃあ誰だって言うのヨ？ 今、私の目の前にいるアイツは…」

「……………畜生オ……………んで神楽コイヅに見えるんだよ……………！！！」

「……………旦那……………」

弱々しい声しか出せない自分に嫌気が差す。

関わる機会なんてそれほどなかったはずの銀時や神楽は、あんなにも、正面から向き合おうとしているのに。

…それがどんなに歪んだ愛の示し方だとしても。

知らないところであったのだ。

神楽には。あの人との接点が。

だから、尚更、辛いから。

歪んだというのだろう、人々は。

誰を責めることも出来ないと言っのたろう、人々は。

だが、山崎にはそんなこと言えそつにない。

言おつとも思わない。

きつと彼と彼女に関わつた者は、皆思つたろう。

ああ神様。何故、二人を引き離すことが出来たのですか

涙は枯れた。

貴方のことを思ったび

私は自分の無力さを知る。



「.....え？」

風が、銀時たちの頬を撫でた。

「...おい、万事屋」

「ああ？ 何だよ多串くん？」

「……早く連れて帰れ」

山崎以上に、参っているのは土方だと思った。

「……そんな人殺しそうな顔してこっち見るなよなア。…ちゃん  
と連れて帰るから」

言った銀時の顔は真剣で、そんな顔はもう何回も見ているのだ。

毎日、彼女は彼を捜しにやってくる。

「ほら、帰エるぞ」

「…待つて、銀ちゃん」

「あ？」

壁に掛けられた彼の隊服が、微かに揺れた。

「…！」

しゃがみ込んでいた山崎が部屋を覗き込んだ。  
土方は目を見開く。

「……………そー…」……………？」

シャボン玉を吐き出すかのように、土方はその名を呼んだ。

「皆さんお揃いですね…。人の部屋で何してんです？」

「な、に……してるって……ちょ、待てよ……そんなこと、あるわけがねえんだ……」

「ザキイ、近藤さんはどーしたイ？」

「…寝てますよ」

こんな時になって、山崎は冷静さを取り戻す。

「…おい、こいつア一体……」

銀時が訊く。

「旦那……そいつのこと、宜しく願いますよ」

「！ ちょッ……待てよッ……！！」

まだ、話していないではないか。

肝心の神楽と

言葉を交わしていないのに、彼は還らうとする。

「やど……………！ 沖田…………沖田ア！」

精一杯の声を張り上げた。

けれど彼はそよぐように、微笑むばかりで。

「待ってヨ…！ まだ、私、言っていないことがあるのに……………！」

一歩、沖田は踏み出す。

「！」

神楽の手を取った。

銀時が俯いて、言葉を紡ぐ。

「…………頼む。こいつを…………連れて行かないでくれ」

もう一度沖田は笑った。

「…連れてなんて行けませんよ」

「！ おきッ…」

そこに居る誰もが、その声を上げた。

「…」

沖田は、そつと神楽に口付けをして、徐々に消えていく。

「ま、待ってヨ！ 私まだ、お前に何も言えてない……………」

一際優しい風が吹いた。

「……………」

伝えなかった言葉はまだ沢山、沢山あるのに

どうしてそれさえ、許してくれないのですか

今までのお礼に、文句とか

そして…好きだということ

……ああ、そうか

言ってしまったたら、彼がここに留まってしまうから

だから…許されないのですね

ならば私は言葉を呑み込みます

あの人が困るようなことは、したくないから

最後までいい、大人ぶっても良いじゃないですか

ただ、神様に一つだけ

どうしても、どちらかが居なくならなければなりませんでしたがか  
？

……長い夢だった。

そう、神楽は沖田に告げた。

いつもの河原で。

「…へえ。そりゃあ変な夢ですねィ」

いつもの通りに、彼は鼻で笑う。

「……笑い事じゃないネ。私は心配で眠れないアル」



「心配？」

不意に、沖田が低く言った。

「そりゃ心配ヨ。誰だって、知ってる人間が死ぬのは嫌ネ」

「……………そーですねイ。俺だって、いつ死ぬか解ったモンじゃねえし。…まア、正夢でもなければア死なねえけど」

「そんなもんアル」

ふうと溜め息を一つ吐くと、神楽は向き直って言った。

「……………どこにも、行かないでヨ？」

沖田は優しい微笑みを見せた。

「……………行くわけねえだろイ」



「嘘つきネ。お前は」

あの日、話した河原だった。

「『どこにも行かない』って言ったのに」

肌寒く、人々は厚着になっていく。

神楽もまたそうだった。

「…ねえ、あれは正夢だったってことアルか？」

自嘲的な笑みを浮かべた。

「……知ってたんでしょ、もうすぐ自分が死ぬってこと。ギリギリまで此処で話して、喧嘩して……」

冷たい風が、頬を撫でる。

「お前はつくづくズルい奴ネ。自分が死ぬって解ってるのに、同じ夢を聞かされて、笑えるだなんて」

ああ神様。どうしたら良いのですか。

淋しいと、心が悲鳴を上げています。

「神楽」

銀時の声だった。

「お前、また………」

振り向いた神楽は、泣き腫らした目で精一杯笑う。

「大丈夫ヨ。私……解ってるから」

解ってなどいない。解っていたら、こんなところへ来るはずがない。

「神楽ア」

「解ってる…解ってるけど」

土手を駆け下りた銀時は、神楽を抱きしめた。

「解ってるのに………！！」

「…」

あの夢と同じ、優しい風が吹いた。

「！」

「ああ…またこんなところにいるんですねィ」

「沖田………」

「安心して下せエ、旦那。連れて行きゃしませんから」

「…んなこと、心配してねえよ」

沖田は銀時に微笑むと、神楽に向き直った。

「……………なんつー顔してんでイ、情けねえなア」

「……………総悟オ」

神楽は震える声で、彼を呼ぶ。

「ん？ 何でイ」

「私……………ずっと言いたかったネ」

こんな状況をすんなり受け入れられる自分に驚いている。

「文句はいつぱいあるから……………そんなの、今はどうでもいい。だから」

「だから？」



「……………」好き」

沖田は柔らかく笑った。

銀時はその笑顔が、誰かに似ていると思った。

「俺もでイ。神楽」

そうなんだ。

あいつが残していったのは、こんな想いだけじゃない。

伝えなければいけないモノ……言葉を

こんなにも沢山、私にくれていたんだね。

枯れたと思っていた涙が、今再び溢れ出す。

「っ…やだあああっ」

溢れるのは大粒の涙だった。

「ああああああっ！」

銀時は何も言えなかった。

ただ、ひたすら、彼女の頭を抱えて。

「っっっ…ヒッ…っく…」

ああ、どうして。

前はあんなに未練があったのに、もう全部なくなってしまった。

馬鹿だねイ。

また会いてえなら泣くなよ。

…なんて言ったら、また怒られちまうんだろうなア。

だってあんまりじゃないか。

やっと好きだと気付いたのに。

こんなにも早く、君は居なくなる。

手が、もう届かない。

同じ風が、銀時と神楽のもとを過ぎていく。

神楽は涙を拭いた。

「……さア、帰るアルよ」

「……もう、良いのか」

「何言ってるネ。もう充分すぎるくらい泣いたヨ」

そう笑う彼女には、もう無理は感じられない。

「…って総悟アイツが言ってるヨ」

土手を上って行く途中で、神楽が声を上げた。

「あ！」

「…何だよ」

「…言い忘れたことがあったネ」

「あれ以上の言葉があるかよ、馬鹿娘が」

保護者の前で青い告白なんてしやがって、とぶつぶつ言う銀時を背に、神楽は呟いた。

哀しくないなんて嘘になる

淋しくないなんて嘘になる

私は嘘は嫌いだから

もう何も言えないよ

けど

一つだけ、言えることがある

愛してるから

誰かと同じ、優しい夢を

いつか想いは、花束にのせて

だからそれまでは

おとなしく

終

004(後書き)

次は後書きです



## 000：後書き

と言っわけで終わりました。  
如何だったでしょうか

この前にミツバ篇のお話を書かせていただいたということで、もう一度、命の尊さを考えてみようと思いました。  
自分なりに考えて、  
どんなに嘘み合っても居なくなったら淋しい人っている。  
だから生きることが必要なんだと。  
命ってそういうことが出来るから尊いんだと思っただんです。

簡単に死ぬことの出来る世の中になってしまいましたよね。  
そりゃ生きることには疲れた人にとって、死ねれば楽なんでしょうけど、  
残された人の痛みって半端じゃないと思っんです。

勿論、沖田さんはそういう理由で死んでしまったんじゃないですけど…

やっぱり、一緒にいる相手の存在って大きいですよね  
どんなに疎ましくても、やっぱり大きいんです  
いなくなると、もう二度と会えなくなると  
そんなこと考えたくない…

死ネタが嫌いな方はすみません。

けど、一度で良いから、こんなことについて考えてみてほしいです。

次作はまた明るいのを書けたらいいなあ^^

とか言っただけでやっぱり暗かったらすみません

最後に

これからも沖神を愛していきましょう！

もう定番ですね^^

そして槻夜も、宜しくお願いします！

リクエストとか感想、評価、とても嬉しいです

また気が向きましたら、声かけて下さい^^

貴方も明日を見るために、今日にさよならを言いましょ。

槻夜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2561f/>

---

さよなら/銀魂/沖神

2010年10月9日13時18分発行